

針葉樹會報

復刊第28号



発行日
1970年12月20日
発行所
針葉樹会
印刷所
錦光社

針葉樹会報

復刊 第28号

編集人

松戸市小金原団地
6-13-27-207

高崎俊平

日本百名山

山田亮三

まさかその後自分が、ふたたび山登りを復活させ、深田百名山の登頂に執念を燃やすようにならうとは、当時は夢にも考えてはいなかった。

☆ ☆

深田久弥さんの「日本百名山」をはじめて手にしたのは何時の頃であったか。まだ山登りを復活させる以前のこと、折にふれてこの本をひらき、もはや遠く離れ去った山の世界を、せめて机上で楽しむことで気を晴らしていた。

そうしたある日、例によつて晩酌の一パイを傾けながら、ハテこのオレは、学生時代に深田百名山のうちどれだけの山に登つたか、指折り数えてみてガツカリした。あわれむべし、僅か二十五山にしかすぎない。

僕の山岳部生活の後半は、二度の遭難あり、戦争の激化ありといった具合でたいして山に登れなかつたことは確かだが、それでも情けないではないか。足繁く通つたつもりの北アルプスでさえ、白馬や常念といったボピュラーな山に登つていらない。東京近郊の山では雲取や大ボサツなど、誰もが行く入門コースを歩いていない。

何故もう少し頑張っておかなかつたかと、悔やまれてならぬと同時に、この百名山の全部に登り、いやそれ以上上の沢山の山に登り、こうした本をまとめることができた深田さんという人が、まことにうらやましくてたまらぬ思いであった。

昭和四十一年の五月の連休に、ムリヤリ五竜岳につれて行かれ、チャホヤおだてられて良い気持になり、年甲斐もなく山登りのリバイバルを宣言した。中島（寛）倉知、佐藤（之）といった連中の陰謀にまんまとひっかかったわけだ。それがどんな陰謀であったかは、山本（健）隊のヒンズークシユ遠征のあと、会報の発行速度がみると見る落ち、実のある懇親山行が何一つ行なわれなくなつた事実をみればわかる。

もつとも今から考えれば、おかげで僕も山登りを取り戻したわけだから、むしろ彼等に感謝すべきなのかもしぬ。四十一年はその後の七ヶ月に七回、四十二年は十二回、四十三年は十四回と山に行き、どうやら定期的な山行の習慣ができあがってきた。

はじめは格別百名山を意識していたわけではない。とにかく自分がまだ山に登れるということが嬉しくてたまらず、山でさえあればどこでもよろしいという素直な心境で、事実山はどこに行つても楽しかった。この三年間にはじめ登つた山のうち、百名山にランクされているのは、焼岳、十勝岳、常念岳、磐梯山、木曾駒ヶ岳、岩木山、巻機山、御岳の合計八山。たまたま登つた山が百名山というにすぎなかつた。

ところが人間、欲がでてくるものである。定していたが雨でダメ、十月雨飾山、妙高山 平はやはり一見の価値がないとはいえない。

同じ金と暇をつかって山に行くなら、でき十一月武尊山、那須岳と続け、この年は合計 るだけ良い山に登りたい。良い山なら深田さ十三山、山行・スキー行二十一回のうち、過のも大好きだが、要するにそれはお茶漬の味んがチヤンと百も選んでくれていてはいけない半が百名山ということになり、いよいよ病膏である。戦後二十年のブランクのある僕は、か。俄然として百名山を意識しはじめたのが盲ということになってきた。

昭和四十四年の春頃であろうか。

☆ ☆

その年の四月、大ボサツを柳沢峠から黒岳

まで歩いたのを皮切りに、六月浅間山、七月

苗場山、八月白馬岳、九月みずかき山、十月

白山、恵那山、十一月会津駒ヶ岳、十二月両

神山と連月の百名山通い。この一年で過去三

年合計を上廻り、この年の山行・スキー行

二十回のうち、半ば近くが百名山ということ

になつた。

「百名山にこるなんて俗だなあ」

と倉知君がいった。そうですかねえ。

目 次

○日本百名山…………… 山田亮三 (1)

○荒沢丘点描…………… 中川孫一 (5)

○お知らせ…………… (6)

○身辺雑記(1)…………… 吉沢一郎 (7)

○想出の銀山平へ…………… 松本謙三 (8)

○滝谷から西穂…………… 加藤正巳 (10)

○今年の秋…………… 岩崎利一 (11)

○編集後記…………… (12)

○想出の銀山平へ…………… 松本謙三 (8)

○滝谷から西穂…………… 加藤正巳 (10)

○今年の秋…………… 岩崎利一 (11)

○編集後記…………… (12)

○想出の銀山平へ…………… 松本謙三 (8)

○滝谷から西穂…………… 加藤正巳 (10)

○今年の秋…………… 岩崎利一 (11)

○編集後記…………… (12)

四十五年に入ると、どうやら百名山稼ぎは、本による“開発”といふ名の破壊のえじきど執念のようなものになり、二月の雲取山からなりつつある。藏王山、岩木山、八幡平など、はじまって、ヨーロッパ旅行で四月一パイをもはや山登りの楽しみを僕たちに与えてくれ棒にふつたが、五月開聞岳、安達太良山、六なくなつた。那須岳もそれに近く、八甲田や月吾妻山、岩手山、八幡平、七月東北朝日岳、伊吹山もそうであろう。名山だから俗になる鳥海山と専ら東北に足をのばし、八月には

ということはたしかにある。

“北アルプスで昔を偲ぶ会”に便乗この地域 だがそろはいっても良い山はやはり良い山でただ一つ登り残していた黒岳（水晶岳）に である。弘前から見る岩木山はいぜんとして石弘光君や日江井さんのお嬢さんと一緒に登名山であり、冠木伊右衛門さんからの御便りつた。九月は中川さん、日江井さん、倉知君では、蔵王にだつて登り方次第で楽しめるコと荒沢岳に行つたついでに、魚沼駒ヶ岳を予一スがあるという。俗化したとはいれ、八幡

山登りという御馳走をまだ十分に喰べていな
い。もう暫らくはフル・コース喰べたぞとい

う満腹感を与えてくれるような山に登りたい。

何よりも山岳としての景観の美しさが大切で、

そこには一定の高度と、山自身のもつヴオリ

ウムの大きさが必要である。

誰かもいつていていたように、（この原稿を読

んだ中島君が教えてくれた。今西錦司さんだ）

高度は景観の本質を変える。本州中部でなら

二千五百米、東北なら二千米、北海道はよく

知らないが千五百米であろうか。それ以上と

それ以下の山には何か質的な差があるよう

僕には思われる。

深田百名山は、すべてがその条件を充たし
てゐるわけではないが、登つてつまらぬと思
うような山はほとんどない。

また名山だからすべてが俗化しているわけ
でもない。十月のはじめ、信州の大町から小
谷温泉をへて雨飾山に登つた時など、登山口
で学生さんに一人出合つただけ。頂上附近で
ゴロ寝して、翌日金山から天狗原山を廻つて
小谷温泉に下るまで、まさしくたつた一人の
山であった。その翌月、中島寛君と行つた武
尊山も、上ノ原口の避難小舎から頂上をこえ
て花咲まで、これまたたつた一人の山であつ

た。

☆ ☆

すべてが楽しい思い出の山登りのなかでも、
御岳と木曾駒ヶ岳は、冬に登つたという嬉し
さが加わる。御岳を飛驒から木曾へと越えた
のは十一月末の連休だが、もうリツバに本格

的なピツケルとアイゼンの世界。ああ自分も

まだこんな山登りができるのかと、何ともい
えぬ嬉びをかみしめた。途中で足がつりそう

になり、もうダメだという僕を、何とか頂上

まで引上げてくれた大橋・木村両君の友情が

忘れ難い。

木曾駒と宝剣に登つたのは十二月末のクリ
スマスの前後で、当時失業中の倉知君をシエ
ルバに、正真正銘の厳冬期に三千米（一寸）
欠けるが峯の頂上を踏んだ。千疊敷までロ

安達太良、吾妻にはじまつた東北の山の巡
礼は、岩手、朝日、鳥海と続き、そのどれも
が僕にとってはフル・コースの御馳走であつ
た。

同じ百名山といつても、一回登ればそれで
良いという山もないではない。だが岩手と朝
日は、どうしても紅葉の時期にもう一度行つ
てみたい。岩手山の御釜、御苗代という二つ
の山上湖附近の新緑の美しさは、紅葉の素晴
らしさを保証している。夏の朝日の花の見事

さに感嘆した僕に、狐六小舎の番人は、夏の

朝日なんてメジやない、秋の紅葉の朝日をこ

らんなさいといった。再遊を期さねばならぬ

雪白い飯豊の山々を遠望しつつ歩いた二日の
山旅の思い出は、これまた忘れ難い。

ではないか。

だがそれにもまして、鳥海という山に僕はほれこんだ。登ったコースが良かったこともある。二ノ滝から登って湯ノ台に下る僕たちのコースこそ、鳥海を真に味う最良のものだと思う。その二ノ滝口を教えて下さったのは村尾さんである。さすが大ベテランの指示に間違はない。渓谷あり高原あり山上湖あり、頗る変化に富むだけでなく、千畳敷と呼ばれるその高原の雄大さ、美しさ、おそらく鳥海一であろう。湯ノ台への下山路は、高山植物の宝庫である。朝日も花の山だが鳥海はそれ以上で、河原宿あたりのニツコウキスゲの大群落など、あれほど見事なのはみたことがない。鳥海だけはもう一度行くとしても、やっぱり花の季節に訪れてみたい。

☆
昭和四十五年の末で（“今年の”と書こうとしてやめにした。近ごろの会報は、幹事が約束した時期にでたためしがない。ハツキリ年月を書いておいた方が無難であろう）深田百名山のうち、丁度六〇山に登つたことになる。残り四〇山となつたが、今後はそう簡単ではないようだ。残された山は、北海道や四国、九州など、一寸でかけにくいところに多

い。

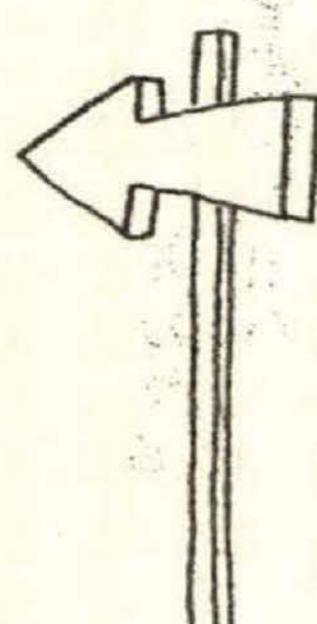
だが僕は何も百名山だけを登っているわけではない。百名山も登るがそれ以外の山も登る。百名山以外にも、登りたい山、良さそうな山に沢山ある。

たとえば森吉山。六月末の快晴の日、八幡平のモツコ岳の頂上から、僕はほれぼれとした思いでこの山を見た。標高千四百五十四米低さをおぎなってなお余りある名山とみた。しかるべき山の、何と堂々たる風格をもつことか。そのヴオリウムの大きさは、背丈の夏、温泉に滞在、牛形山や駒ヶ岳に登つたあと、経塚山から焼石岳を縦走して水沢にでる山旅も、久しい間の僕の夢だ。越後の山か会津の山か、秘峯といわれた御神楽岳も、地図上にみる岩壁の記号からだけでも是非一度は訪ねねばなるまい。

ああ、登りたい山、登らねばならぬ山は無数にある。まことに日本は山国であり、その山国に生れて山が好きになり、いままた山に登ることができるように成了た自分は幸福だと、つくづく思わざるを得ない。二十代、三十代の人とちがつて、僕たちの年配になれば、もう自分の人生の先がみえている。これまでの惰性でしか生きぬこれから的生活の見通

しのなかで、もし山がなかつたらと考えるとゾツとする。それを思えば五年前、山登りを復活させるキッカケを与えてくれた中島君や倉知君たちに、文句どころか、あらためて御札をいわねばならぬようだ。

僕は若い頃からむやみに酒を飲みタバコを吸い、いままも一向にそれは変わっていない。先日雨飾山でゴロ寝した時も、持参したブランディ一本を全部飲み、翌日はさすがに二日酔い気味で難儀をしたが、そうした不摂生を続ける僕が、それほど長く生きられる筈はない。もう覚悟はしているが、せめてあと十年だけはほしい。この間に深田百名山を全部登り、そのほかにも沢山登り、あらためて山田百名山を選ぶことができたら、もって冥すべしというのが、最近の正直な心境である。



荒沢岳点描

中川孫一

灰ノ股、兎岳、中ノ岳へのルートは、各々の中間に更に二、三の大きなコブや篭漕ぎがあるので、樂ではないだろう。しかし、閑かに、清らかな尾根道が期待できる。

銀山平から直登一二〇〇M、急・緩・前嶠(岩場)・緩・急という変化に富んだルートである。銀山平から前山への急登三〇〇mは、粘土状の登山道が雨水で抉られてU字溝になっているので、雨の日は滑る、濡れるのイヤな道になる。前山から前嶠下までは、緩い起伏を繰返しながら約二五〇m登つてゆくが、道の両側はピツシリ石楠花だから、初夏の花盛りは見事だろう。又両側の谷(中荒沢・蛇子沢)も、雪渓がすばらしいだろう。呼物の前嶠の鎖場は下の鎖(私称)と上の鎖(私称)に分れる。下の鎖は樹林の中の露岩を結んでいる。登り終えて、やせた岩尾根に出ると、ハツと息を呑むような直立五、六〇mの大岩壁が行手に立ちはだかる。これが前嶠の本番だ。しかしルートはこの岩壁の左下をトラバース(ここから上の鎖になる)して、順層の岩場(傾斜四〇~五〇度)を登る。ホールドが良いので、鎖は念の為といつてよい。下の鎖も同様だ。上、下を通じて、短いスラブ状の岩場があるが大したことはない。総じて鎖の効用は降りに役立つ。鎖場の通過に四〇分、高度を約一五〇m稼いで、一五〇〇mの尾根に出て最後のツメ約四〇〇mにかかるが、初めは緩く、稜線に近づくにつれて急になり、最後は梯子を登るようになる。そう感するほど木の根が靴に引かかる。

稜線に出ると、小さな岩峯が三つ待ち構えている。最初は右を、二つ目は左を捲き、三つ目を直登(短い鎖がある)で越えると主峯との浅い鞍部に出て、忽ち狭い頂上に立てる。根本をケルンに囲まれた木標が一九六八mの△を示している。

頂上はさすがにきれいだ。石油罐の中に空罐が少々しててあるだけ。針金で十文字に縛った蓋のある石油罐を開封したら、縦走者の名残の食糧(アルファ米、砂糖、ソーセージ他)がギッシリ詰まっていた。棄てる文化が登山にまで及んでいる現代の縮図を見たように思つた。

蛇足・前ルートは蛇子沢の右峯だが、左岸には前嶠の蔭のない尾根(詳しくは蛇子沢の左股と右股の中間)が、頂上直下まで突上げている。尾根の長さは前嶠尾根(私称)の半分(従つて全体が急登)で、下の方は蛇子沢が沿っているから、起点は石抱橋付近となる。

前嶠ルートは、荒沢岳の地理に明るい地元の山岳会が三十四年に開いたといふから、ルート選定のとき、蛇子沢ルートを探らなかつたのは、前嶠の鎖場やその前後の緩い尾根、主稜の三つの岩峯が、ルート全体に緊張と弛緩の変化を与えるという点を高く評価したのではなかろうか。

岩魚

銀山湖の大岩魚は噂にも聞いていたし、先年熊さんが、地元の日立山岳会支部長から岩魚釣に招かれたときの釣果の写真が、河原に立てた一升瓶に匹敵する大岩魚であったことからも、銀山平での食糧には期待をかけていた。しかし三溪荘の玄関に張りめぐらされた木標が四五六〇センチの大物揃いであるのに先ず驚いた。

その上宿の主人が「台所にありますから見て下さい」というので、混んで、銀山平も夕暮の観光地になり下り、「養魚の岩魚」が御土のぞいてみると、まるで鮎のように大きい岩魚が、大きなバツトの产品になるのではなかろうか。

中に四、五尾横たわっていた。

「味噌漬にして売るんでしょう」とH君が云つた。

ところが夕食の膳を見て驚いた。岩魚の切身の塩焼が皿にのつては村杉、石抱橋の辺に及んでいる。そこでこの辺を新たに「銀山平」と呼ぶことになった。やがて日光一尾瀬一銀山平+奥只見ダム一小身となると淡水魚では鮭か鯉である。岩魚の切身というのは魚体が鮭鯉級であるということである。事実、奥只見山荘（銀山湖船着場の旅舎）の玄関の魚拓は七〇センチ三キロといふまるで鱈のような大魚であった。

釣場の大半は、北ノ股、中荒沢、中ノ股、恋の股という銀山湖にそそぐ幽谷で、銀山湖のは二、三に過ぎない。岩魚は元来、溪流の魚であるから幽谷が当然であろう。

先年、奥鬼怒の八丁湯で、牙のある岩魚の魚拓に胆を潰したが、今度は鱈に匹敵する大魚で認識を新たにした。

こういう大きなのが現存するとなると、田中貢太郎の「岩魚の怪」という怪談や、蛇を水中に引きずり込むという奇談も、どうやら本当になつてきただようだ。

岩魚の悪喰は有名だが、林君が、遠山川の岩魚のウルカですといつて持つてきてくれた代物には、悪喰を恐れぬ私も閉口した。物凄く油ぎつていて、沢が増水すると岩魚は砂を呑むという言伝えの通り、ウルカを入れた瓶の底には砂がたまっていたのである。

岩魚の釣れる場所は、まだ秘境であるが、奥只見ダムサイトに通ずるトンネルの中途から銀山平に抜けるトンネル工事が昼夜兼行ですすめられているから、近く全通の晩には遊覧バスがフンサと入り

蛇足、奥只見ダムの完成で、昔の銀山平は銀山湖の湖底に没し、バツクウォーターオークは、只見川本流では鷹ノ巣（尾瀬口）北ノ股川では村杉、石抱橋の辺に及んでいる。そこでこの辺を新たに「銀山平」と呼ぶことになった。やがて日光一尾瀬一銀山平+奥只見ダム一小出を結ぶ観光コースが開通するだろう。それを見越すかのように、中小企業の山荘や、地元資本のレストハウスの地均らし工事がすすんでいる。

銀山平の山青く、水清きを望むわれわれにとつては、悲報の遅きを願うばかりである。

お 知 ら せ

* ヤロー会の掉尾を飾つて、有賀 益会員（昭三六年・丸紅

飯田）が結婚されます。

新婦は、松本市の美樹さん。（四六年一月二三日 於赤坂ブ

リンスホテル）

* 丸山会員からの便り

「御無沙汰しています。ニュージーランドで正月を過すつもりでしたが、極度のインフレにより財政難におち入り、海水浴をしながら、真夏の正月を過すことになりそうです。

（ニューカレドニアより）

身辺雑記

(1)

吉沢一郎

大正一年と言えば一一を加えて一九二二年、これは一橋山岳会が生れた年だ。一九七〇年、七〇から二二を引くと四八年。即ち私は山と共に約半世紀を過して来たことになる。

同じことは松木の謙ちゃん、村尾のベンちゃんなどにも言えることだが、この二人の登山歴はもっと古いかも知れない。尤も丘みたいな山を入れたら私の登山歴も五〇年を越すことになる。

それにしても六八才の今日までよくあきもせず山一筋に生きて來たものである。而もその上、年をとるに従つて一日が五〇時間もあつたらと思えるほどの忙しさで毎日を送つてゐる。期限のある原稿の期日が迫つてくる。書かねば書かねばと思つてゐる海外の友人への返事もおせおせにおくれてしまう。悪いと思ひながらもなかなか書くひまがない。

しかしこうしたことの中にも多少自業自得の点がない訳でもない。外国の雑誌や年報を見つけて、これは有益な記事だと思うと直ぐ訳したくなる。訳しても発表しなければ何も

ならない。雑誌の編集長に連絡する。宜敷くとくる。

だから私の原稿には注文されたものとこつちから積極的に出すものと両方ある訳だ。どが多い。しかし何かを人に知らせるという意味ではそう下らないものはないつもりだ。自分が一〇年になるが、私がアンデスを調べはじめてから勘定すると二〇年だ。

それを見ると一橋隊の初登頂したプカヒルと渓谷一誌にもう毎月一〇年近くも続けていたがわかつていなかつたのである。今では高い方がだんだん登りつくされて、五〇〇〇五五〇〇米の間の山が風漬しにやられている時代となつてゐる。

ところで山の地図あるいは概念図は各地域、山群毎に大部発表されてきたが、私が一〇年探していたコヨリティ山群とアウサンガテ山群のつながりを示すカム・カルテ、いわゆる骸骨地図が今年の五月にやつと手に入った。私の頭のしこりがこれで一つやつとほぐれた。まだほぐれないところが幾つかあるが、こういうところが一つ一つ瞭つきりわかつていくということは實に愉しい。

こういうことは人に頼んでもダメだ。現地へ行つてわかっている筈の人に頼んでもなか

とを書くようになつたかといふとそれは好奇心という三字につきる。あやふやなこと、知りたいことをそのままに済ませないといふ出

因縁な性分に由来するものであろう。一九六一年にわれわれは皆さんの御援助でアンデスへ行つた。これも早いものでもうやがて一〇年になるが、私がアンデスを調べはじめてから勘定すると二〇年だ。

なかやつてくれない。万が一やつてくれたなら儲けものだが、やつてくれないからといって文句をいうのは筋もちがうし大人気もない。わからることは何年かあってもいいから自分で辛棒強くやるのが一番だと思う。



この間、昭和三年全国大会が伊豆の長岡（伊豆ホテル）で開かれた。卒業四二周年記念ということがだた。何故こんな半端な時にやつたかということは四五年までは待てない人がいるだらうからなんだそうだ。

想出の銀山平へ

松木謙三

十年前に病つたので四、五年山行を休んだらついその後も憶却になつて出かけないでいた。今年は戦前何時も一緒に登つた兄の七周忌の法要で郷里長岡へ帰つたので二人で何度も歩いた銀山平を取囲む山々眺めに寄つた。十月末の寒さで越後の山波は急に真白くなつてゐる。十一月四日小出駅に下りて銀山平行のバスを聞くと枝折峠迄雪で昨日迄車は出なかつたと云う、幸い二番バスから出る事になつたので行くことが出来た。来年八月十五日からトンネルで奥只見の発電所迄バスが行くそだが今は枝折峠を通つてゐる。峠の鍛打だ。小倉山への途中腹がへつて何とも動けなくなつて鍛打の中戦前しかも五十年前に何回か峠を行來した時は小出から歩いたわけ

なかやつてくれない。万が一やつてくれたなら儲けものだが、やつてくれないからといつて文句をいうのは筋もちがうし大人気もない。わからることは何年かあってもいいから自分で辛棒強くやるのが一番だと思う。



この間、昭和三年全国大会が伊豆の長岡（伊豆ホテル）で開かれた。卒業四二周年記念ということがだた。何故こんな半端な時にやつたかということは四五年までは待てない人がいるだらうからなんだそうだ。

矢張り年がふけてくると死ぬ数も増えてく私は実をいうとそれを聞いて嬉しくなつた。控えているので何十年も駄文を書き続いている私が褒めら

だ。峠の紅葉は丁度真盛りだがどちらかと云へば緑樹が多く真紅の樹木は少い。ぐねぐね曲る坂道何回位曲るのか運転手の話では三百六十位だという。紅葉よりも駒ヶ岳の姿が朝日を受けて綺麗だ。途中から駒の左肩に中ノ岳が時々顔を出すこれも真白だ。最初に八海三山と越後で言つてゐる八海山、中ノ岳、駒ヶ岳を馳けたのは予科に入った大正十一年の七月兄と二人だった。

八海の行者の小屋に一泊、中ノ岳の山頂下の雪田縁に一泊、翌日は駒ヶ岳頂上に一泊して小倉山から枝折峠に出た。行者が時偶通るだけ踏み跡はあるが道らしいものではないが稜線伝いなので大した苦労もなかつた。駒ヶ岳近くになつた時信者が鍛打を刈つて道を造つていたのに会つただけだつた。ひどいのは、駒ヶ岳から小倉山一枝折に腰を下して飯を食つたのは忘れられない。食べたら急に元気が出

るから生きているうちに度々会つておこうとされたことが一度もないからだ。褒められたのいう訳だ。準会員の未亡人が一〇人位来ていてが呑んべえのベンチやんだつたから一層嬉しかつたのである。

その時私は謙、ベン、Fの三君と同室になつた。ベンちゃんの曰く、「一ちゃんがしばらく」山と雪に書いていた「切手と山の友達」という隨筆はよかつたね。ありや一ちゃんが今まで書いたものの中で一番愉しく読めたよ」と。

私は実をいうとそれを聞いて嬉しくなつた。控えているので何十年も駄文を書き続いている私が褒めら

だ。峠の紅葉は丁度真盛りだがどちらかと云へば緑樹が多く真紅の樹木は少い。ぐねぐね曲る坂道何回位曲るのか運転手の話では三百六十位だという。紅葉よりも駒ヶ岳の姿が朝日を受けて綺麗だ。途中から駒の左肩に中ノ岳が時々顔を出すこれも真白だ。最初に八海三山と越後で言つてゐる八海山、中ノ岳、駒ヶ岳を馳けたのは予科に入った大正十一年の七月兄と二人だった。

八海の行者の小屋に一泊、中ノ岳の山頂下の雪田縁に一泊、翌日は駒ヶ岳頂上に一泊して小倉山から枝折峠に出た。行者が時偶通るだけ踏み跡はあるが道らしいものではないが稜線伝いなので大した苦労もなかつた。駒ヶ岳近くになつた時信者が鍛打を刈つて道を造つていたのに会つただけだつた。ひどいのは、駒ヶ岳から小倉山一枝折に腰を下して飯を食つたのは忘れられない。食べたら急に元気が出

て歩けた。丸一日かかった。今枝折峠から思い出しながら眺めてい
る。峠に出ると前面に荒沢岳の雄大な姿が現われる。夏は偉い撫の
密林で中川さんが一日かかったところ、つまらぬ山だが今上半身新
雪に被れたところは大した山容だ。尾根は出ているが谷は一杯の雪
実に堂々たるものだ。惜しいことには平ヶ岳は丁度後にかくれて見
ることが出来ぬ。平ヶ岳は奥まつて鎮座ましましてるので、中ノ
岳か、景鶴か、会津駒ヶ岳に上らねば見えぬ山だ。是非一度行つて
見たいので亡くなつたドンちゃん、九郎ちゃん等と昭和元年かの五

月初めに雪のある時至仏から尾瀬へ出て景鶴から尾根伝いに行つて
みたが天気は良し誠にのんびり行けた。やはり此の辺の山は雪の上
に限る。

今枝折峠から銀山平と見ると北向の勢か紅葉どころかもう冬枯の
感じ、撫は全部葉が落ちてぶちに幹と枝だけ誠に寒々とした感じだ。
ダムの端に下りると船はもう引き上げてなく、茶店も一両日中に店
を閉るらしい。昔歩いた時は須原口(北岐川、只見川合流点)迄に一、
二軒移住民の小屋があるだけで冬は熊を捕り普段はお腕や杓子を作
つていて我々が行くと珍らしがつて岩魚をとつててくれるやら苛
を採りに行くやら歓待されたものだが、今はダムの一部になつてい
ることだろう。嘗て会津に抜けた時の道も須原口から只見川に沿つ
てへつついで歩いた道(道というより通つたという方が正しい)大
島沢との合流点迄只見川に下つて未丈岳を越えて大湯に出たのだが、
その合流点にあつた宮林署の小屋など今はどんなになっているやら、
バスがなくなるので行つたバスの帰るのに乗つて早々に引きあげた。
兎に角当時の根拠地大湧の東営館に一泊せねばと泊つた。嘗ては東
栄館一軒、しかも淋しい湯治場だったのが今は地下四階地上四階の

洋館の本館に川向うに新館、別館など幾棟も建つて主流の観光ホテ
ルで各地の団体客で大繁昌している。先に頼んでいたので支配人が
来ての話では、昔、山案内をした者で生きているのが一人、宿の老
婆が知つてゐる程度だ。

自分は今年の冬コタツで山の本を読んで私等の只見川沿いに歩い
た記事を読んだという。「針葉樹」には東栄館の広告を毎号貰つて
いたので多分「針葉樹」を読んだものだと思つた。

会費納入のお願い

竹中彰

会費納入率が低く、運営資金に苦しんでおります。取りに来
ればすぐ払う、という方が大半と存じますが、何分学生の数が
少なく、なかなか頂戴に伺えないので、ご面倒ですが銀行振込
か現金書留で至急ご送金下さるよう、お願い申し上げます。
振込先は、三菱銀行本店サービスコーナー針葉樹会普通預金
口座№4017529

郵送先は、▼一七〇豊島区駒込六一三一二一三〇二興銀染井
寮 竹中彰です。

(十二月十五日現在会費納入者——敬称略、入れ違いにご入
金の場合はお許し下さい) 中川孫、吉沢一、松木、近藤、冠
木、手塚、増山、鈴木英、柿原、佐々木、船本、森一、原田、
大賀、竹中、小野、山本溢、池知、中村雅、加藤、佐藤政、吉
川
以上二三名、納入率一一%

滝谷から西穂

加藤正己

転勤で名古屋を発つ時、大橋さんより「原則として三十才以上の人と一緒に山登りをしないよう」に言われまして、左様心がけておアルプスで昔を偲ぶ会なる山行を鏡平で行なう旨のご案内をいただいたものの、この原則に背く訳にもいかず、涙を飲んでお断わりいたしました。（もっとも針葉樹会報第27号を拝見いたしますと、針葉樹会々員を名乗られる三十才以上の方々は、日本全国時と所を問わず歩かれておりますので、この原則を断固守る為には「山に登らない事」しかなくなつてしまふのであります。）

× × ×

ある今日、東海道線のすべての駅を一つ一つ島さんは多忙の故入山が一日遅れました。この秋には結婚の披露宴をしなければならぬとあせつておられます）の諸兄がそれで、いづれもワタシのような平凡な庶民には及びもつかないビューティフルな生活と意見の持主たる者たるが（よく判りませんが、とに角、ワタリを登る）程度の連絡だけをして、すべては現地で落合つてから、という線で話が決まりました。

× × ×

案の条、八月二十二日に滝谷の出合（立派な無人小屋が建っていました）に着いた時は、宮武君とワタシの二人だけでした。ワタシ達は一パティ一分の登攀用具を用意して来ま

（滝谷を登つて上高地へ降りるという山行の出発点へわざわざ上高地から入つて来られました）、佐藤久尚（新幹線や東名高速道路の、した。或る社団法人の役員をしておられる中則として三十才以上の人と一緒に山登りをしないかも知れないので、な沢登りはお気に召さないらしく、翌日の滝谷でも、晴れていた朝方は不機嫌に黙々と登ったおられましたが、昼ごろより（ワタシにておられました）不愉快な雨が降つてしまりますから、俄然生き生きとされ始めて、中には原則として）不愉快な雨が降つてしまりますから、俄然生き生きとされ始めて、中には原則として）不愉快な雨が降つてしまりますからして、時や所には「雨に登れば」だか「滝谷は今日も雨だった」だが（よく判りませんが、とに角、ワタラしきもの）を口ずされたり、「落石を遠く聞く時現なく笑い」なんかされたりする方もおられました。歯を喰いしばって登るワタシにとってはウラメしい限りであります。ルートを間違えたり戻れなくなつてしまつたりしましたが、必死の思いで陽気な散歩達の後に付いて行きますと、とうとう頂上に出る事ができました。感激の握手、であります。この夜は北穂小屋に泊りました。

翌日は、岳沢経由で下山される山本さん、岩登り」をしようと考えていた所、世の中の「三十才未満の人」と「穗高で未満」という原則にひっかかりますが、彼のになる事だらうよ、と困っておりますと、雨宮武君の二人と別れまして、久さんとオ一尾場合、「人間は年をとつて死ぬ」という大原の中から山本さん、久さんが次々とお見えに根を登る事にいたしました。——と、キレツ則すら疑問に思われて来ます）、山本溢弘なりました。聞けば、二人共先程申しましたトよりB沢への下降点で、一見して失業者と

判る様な風貌の大男と出合いました。これ即ち中島寛さんでありました。ワタシ達より一日遅れで、檜平と南岳経由で入山されたとの事であります。そこで急拵、三人で手頃なルートを登る事になり、あれこれ物色した所、三人共これまで登っていないという所で、オーバル根のP2フランケに決まりました。

P2フランケは短いけれどもほとんど垂直に見えますので、三月以来岩登りをしていないワタシは（原則として）ビビッてしまう所であります。が、六十トナリが命知らずの三十男と「俺に登れない岩場はない」と信じ切つておられる名クライマーですから、ワタシも、その確信の隅っこにしがみついておれば登れるであろうと確信いたしまして登った訳であります。ナピツチ、二時間でP2に到り、続いて名にも負うオーバル根主稜の冰野クラック午後からは雨が降って来ましたのでそのまま小屋に泊りました。翌日は久さんが下山され、中島さんと二人だけになりました。こうなりますと、相手は人間になれた体力の持主ですから、一緒に登ると何をやらされるかわかったものではなく、何となく身の危険を感じてきます。警戒

しながら彼の顔色をうかがいますと、

「とにかく、先ず、オーバル根を登るうではありませんが、「苦あれば樂あり」とは良く言つたも

とおっしゃいます。断わって首でもしめられたりするのは原則として嫌ですからその通りにいたしました。すると、

「では、とにかく、奥穂まで行こう」

とおっしゃいました。原則通り、その通りにいたしました。今度は

「天狗のコルまで」

次は、

「西穂まで」

そして、

「上高地」

「西穂山荘まで」

山かぎしてかわいそうなワタシは滝谷オーバー

ルム→西穂→西穂山荘→田代橋→河童橋



はわかってくれないのであります。

が、「苦あれば樂あり」とは良く言つたも

ので、折よくこの山荘に泊り合わせた二人の

素敵な美人さんに酌なんかしてもらいました

てすっかりいい気分となり、スコヤカーにグツスリーと眠る事ができたのでありました。

今年の旅 岩崎利一

昭和四十五年には、一月に足柄峠から金

時山を越え、二月に奥志賀の焼額山でスキーチューンを楽しみ、四月、花の吉野山を歩き廻り、七月、富士山の八合目まで登り、十月十一月は四国と関西の寺めぐりしたのが印象に残っている。

七月、富士山の八合目まで登り、十月十一月は四国と関西の寺めぐりしたのが印象に残っている。

十月は四国にゼミナールの恩師米谷隆三と宇和島市の金剛山大隆寺金木犀が見事である。十一月は豊山長谷寺、べん一山室観音寺市の七宝山興昌寺（金山萩の真盛り）と宇和島市の金剛山大隆寺金木犀が見事である。

交通の便がよくなつて、足柄峠まで車が行くし（富士の眺め絶佳）、焼額山も殆んどリフト乗り継ぎで頂上に達することが出来る（ホテル迄の滑降快的）。吉野には獨特の魅力が感じられ、今度は三度目の旅となつた。何かひとを強く惹きつけるものが、ここにはあるのだろう。

み吉野の象山の際の木末には（山部赤人）ここだもさわく鳥の声かも

頂上や殊に野菊の吹かれ居り（原 石鼎）「山」が在ると思うと嬉しい限りである。

前年の春、喜佐谷を宮滝まで降りて、象の小川が千数百年前の姿を髣髴させているのを感じ、赤人の歌を口ずさんで音韻呼応の素晴しさに驚いたのを思へ出す。又、豪華な石鼎句集（昭和四十三年 求龍堂刊）

一つは笠から双六経由、硫黄尾根のコース。も一つは涸沢岳の西尾根を登り、北穂・キレット経由、横尾尾根のコースをとつた。

両隊とも激しい風雪に悩まされ、北穂隊の第一尾根登攀は断念した。

涸沢岳の頂上から、一日で北穂へ行けず。涸沢のコルの小さなテラスに幕営するはめになってしまった日、フィックスザイルを撤収しながら撮った北穂高である。

その後、五日間の猛吹雪（いわゆるクリスマス寒波）のため一步も動けず、上高地に下りた時には、食量が何も残っていないかった。

（高橋）

編集後記

お願いした原稿が、手先に届いた時ほど、うれしい事はない。今回も、忙しい中で、無理なお願いにもかかわらず、お寄せ下さった方にお礼を申し上げます。

年内に発行は出来ましたが、お届けするのが来年になり、残念です。

* * *

毎回お送りした会報の中で、返送されるものがかなりあります。住所変更等がありましたら、御一報頂きたいと思います。

来年も、多くの方々に原稿をお願い致すことと思います。よろしくお願ひします。

（高崎）

